

今年度第4回目となる外国語活動・外国語科の研究授業を主任教諭が行いました。協議会では、絵本を活用した低学年の外国語活動の指導方法について協議を行いました。指導・講評では、京都光華女子大学教授 田縁 真弓先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～ 思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：1年1組 担任

単元名：「形(circle, triangle, square, heart, star)であそぼう」

※絵本「Go Away, Big Green Monster!」

指導講評：京都光華女子大学教授 田縁 真弓先生より



研究主題をもとに、以下3つの視点を中心に授業を行った。

① 個別最適な学び、協働的な学びの一体的充実

今後、個別最適な学びを充実させるため、1年生としては、語彙を増やしたり、分からなかった時の解決の仕方を自分なりに理解したりするようにしたい。方法として絵本や絵カードなどの教材を見直す、振り返りカードに書いて教師からのコメントをもらう、友達、教師、家族、ALTに聞くなど、身近な方法で聞けばわかる、調べたら分かるという経験をさせていきたい。今後はタブレットを使って調べる方法を知らせるなど、段階的に指導をしていきたい。また、年間を通して協働的な学びを行うために、「英語ペア」をつくり一緒に学べるようにしている。ペアは外国語に自信がある児童とそうでない児童が組むことで、困ったときには教え合えるようにする。今回の店役や客役も二人ペアで一緒に活動した。

② 表現を繰り返し使うための工夫

各単元で必ず学習内容に沿った英語の歌や絵本の読み聞かせ等の活動を多く取り入れ、英語には日本語とは異なる独特のリズムがあることに気付かせたり、繰り返し本の朗読を聞くことで、言えるフレーズを自然に発話し、楽しんで参加しながら英語に親しませたりしている。また、表現を全体や友達と繰り返し言ったり聞いたりする活動を多く取り入れることで、児童が自信をもって思いを伝え、楽しんでやりとりができるようにしていきたい。

③ 効果的な中間指導

今回使用した「Go Away, Big Green Monster!」の絵本をもとに、「家族がびっくりするようなハロウィンmonsterカード」を作って互いに紹介しようというゴールを設定した。本時では、児童が店役や客役に分かれ、自分の好きな形を英語で伝えそのカードをもらうという、色の単元でも取り入れた活動(塗ってほしい色を英語で伝え、指定したところに友達に塗ってもらう)を実施した。店役の児童に、客役の児童がほしい形をきちんと伝えないと、店役からほしい形をもらえないという英語を使用する必然性をつくることで、中間指導の際には自然と自分が欲しい形の言い方を確認する流れになった。また、「Come on!」や「Open!」については前の学習の際に店役で使っていた児童がいたため取り上げたところ、すぐに活用する児童が増えていた。

〈授業者自評〉

算数でまだ「形」を学習していないので、外国語活動の授業で先に扱うことはチャレンジだった。しかし、絵本の読み聞かせを繰り返し行っていくと、最初は「Go Away.」のみ児童は声を出していたが、3回目の授業くらいで形や体の部位など言える児童が出てきた。英語やジェスチャーによって、日本語を使わずにコミュニケーションをとる姿が見られてよかった。わからないときは誰かに聞けば解決できるという経験を積ませることができた。

〈研究協議会〉

コミュニケーションを行う目的・場面・状況等について

・「ハロウィンカードを作成する」という最終活動の設定が、児童の意欲向上につながっていた。

個別最適な学びについて

・担任が、「〇〇さんが、わからない形があったときにペアのお友達や近くのお友達に相談していたね。」「〇〇さんは、自分の振り返りカードを確認して、お友達とのやり取りに生かしていたね。」などの声掛けが、将来的に児童自身の目標実現に向け、学習方法を取捨選択する『個別最適な学びの充実』につながるものであった。

協働的な学びについて

・英語ペアを組むことで、自然に児童同士の関わり学び合いが行われていた。

絵本の活用について

・「ハロウィンカードを作成する」という最終活動への意識づけの要素が大きかった。
・絵本で形がでてきたときに、教師が強調して読んだことで、繰り返し形を表す英語を聞かせる機会になっていた。

中間指導について

・既習の言葉の確認をしている児童が多かった。英語(外国語活動)は学級全体が今年度から学習を始めているため、多国籍の児童が在籍する学級で、日本語があまり話せない児童も友達と話し合っていて、「同じ土俵で」取り組んでいた。
・1年生の学習だと困り感が出づらく、あまり質問がでなかった。
・違った形(heart, star)をあえて途中で追加することで、これまで使用していた、「(形) please.」という表現に新たに追加された形を当てはめればよいということ、教師からでなく、児童から言わせたかった。

〈指導・講評：京都光華女子大学教授 田縁 真弓 先生〉

コミュニケーションを行う目的・場面・状況等について

・1年生が単元目標を意識していることで、本来難しいはずのお店屋さん形式でも、学習の見通しを持って取り組めていることがよかった。
・体を動かしたり、絵本を何度も読んだり、低学年の特質を生かした単元計画になっていた。
・絵本を読むたびに読める言葉が増えていったようにスモールステップが重要である。

絵本の活用について

・英語絵本を使った指導案の作成がよくできていて、絵本の読み聞かせからやり取りへの流れがスムーズにできている。
・英語絵本は高学年こそ使ってほしい。

中間指導について

・1年生の中間指導で、知識・技能にフォーカスしているのは高度だが、しっかりできていた。

やり取り(お店屋さん形式)について

・児童が形を貼ってほしいところに指差し、「Here!」を教師のデモンストレーション等でさり気なくまぜていだけで、児童は言えるようになるのではないかと。
・以前の学習で使った「Open!」という呼びかけの言葉を覚えている児童がいて、今回も活用していたが、「お店屋さんでそんなに怒鳴ってお客さんを呼ぶのかな?」ともう一度状況を考えさせることで、テンションだけでさきばしてしまうことを抑えられたかもしれない。
・児童の様子を見ていると、「Two please.」と数を加えてもできたように思う。

振り返りについて

・本時のめあてに立ち返り、めあての解釈を丁寧に行い、どうできたらどんな評価にあたるのか子供たちがわかるようにしたほうがよい。振り返りをさせることは評価をするうえで最も重要である。「楽しかった」で終わらせず、教師がはっきりと価値づけをしてあげるとよい。